津山市埋蔵文化財発掘調査報告第57集

長畝山北11号墳

1996

津山市教育委員会

浜山市教育委員会
文化課
平成　　日
第 589 号
受付

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第57集

長畝山北11号墳

１９９６

津山市教育委員会

序

長畝山北11号墳はホクラク農業協同組合の飼料流通センター敷地拡張に伴い発掘調査された古墳であります。長畝山北古墳群は現存11基からなる古墳群でありましたが、平成２年から３年にかけて、民間の宅地造成計画により１号から９号までの９基の古墳が発掘調査されました。調査の結果は『長畝山北古墳群』で報告したとおりですが、木棺直葬を中心とする埋葬方法を採用した古式の群集墳研究に数多くの貴重な資料を提供することができたと自負しております。今回、残る10・11号墳の２基の内、11号墳１基だけが発掘調査対象となったため、ついに残るは１基だけになってしまったということになります。文化財保護という観点から見れば古墳が消失するということは誠に残念なことではありますが、開発に伴う事前の緊急発掘調査という性格を負わされている以上、致し方ないことと考えざるを得ません。

いずれにしても、発掘調査を実施し記録保存措置を講ずることができたことはこの上ないよろこびであります。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成にあたるまで、文化財保護の趣旨を十分に理解され、全面的にご協力をいただいた原因者のホクラク農業協同組合関係者各位に心より厚くお礼申し上げ序といたします。

平成８年３月31日

津山市教育委員会
教育長　藤　原　修　己

例　　言

1．本書はホクラク農業協同組合飼料流通センター敷地拡張事業に伴う長畝山北11号墳の発掘調査報告書である。

1．発掘調査調査にかかる経費はすべて原因者のホクラク農業協同組合の負担である。

1．発掘調査は津山市教育委員会津山弥生の里文化財センター主査行田裕美、同主事小郷利幸が担当した。

1．本書の執筆はⅠ・Ⅱを行田、Ⅲ・Ⅳを小郷が担当した。

1．本書に使用した方位は磁北である。

1．本書に使用した「長畝山北古墳群と横穴式石室導入前の主要古墳分布図」は建設省国土地理院発行２万５千分の１（津山東部）を複製したものである。

1．出土遺物、図面等は津山市教育委員会津山弥生の里文化財センターに保管している。

目　　次

Ⅰ　長畝山北古墳群の概要と周辺の古墳 …… 1

　1　長畝山北古墳群の概要 …… 1

　2　周辺の古墳 …… 1

Ⅱ　調査の経過 …… 6

　1　調査に至る経過 …… 6

　2　調査の経過 …… 6

　3　調査体制 …… 6

Ⅲ　調査の記録 …… 7

　1　墳丘 …… 7

　2　埋葬施設・出土遺物 …… 9

Ⅳ　まとめ …… 16

Ⅰ　長畝山北古墳群の概要と周辺の古墳

1　長畝山北古墳群の概要

長畝山北古墳群（第１図１）は岡山県津山市国分寺と西吉田の大字境に位置する。平成２年から３年にかけて調査した１号から９号の９基の古墳は国分寺分に、10・11号の２基は西吉田分に属する。今回調査した11号墳は西吉田558－２番地に所在する。

かつて長畝山北古墳群は確認されている限り12基が存在していた。しかし、11号墳の北東に位置していた12号墳は現在消失しており、その規模等を伺い知ることはできない。現在、本古墳群の東側には隣接してホクラク飼料流通センターが位置しているが、元は昭和23年に建設された国分寺中学校のグランドがあった場所である。この場所にも地形から考えて二三の古墳が存在していた可能性が考えられる。そうすると長畝山北古墳群は全体で10数基よりなる古墳群であったと想像することができよう。

さて、報告書（註１）と重複するかもしれないが、調査された１号から９号の古墳を概観することにしよう。まず、埋葬主体部の形態であるが竪穴式石室をもつものと木棺直葬のものの２種類が認められる。前者の竪穴式石室をもつものは１号、５号第１主体、８号第２主体の３例、残りの２号～４号、５号第２主体、６号、７号、８号第１主体、９号はいずれも木棺直葬を採用している。石室の石材には角礫と河原石の２種類が認められ、１号、５号第１主体は角礫、８号第２主体は河原石が用いられている。埴輪は４号にだけ採用されていた。主体部の主軸方向は１号～９号の計12主体の内、５号第１主体を除き基本的に東西方向をさしている。古墳の築造時期は出土須恵器を田辺編年（註２）に対応させると、ＴＫ23～ＴＫ47型式に相当し、５世紀末～６世紀初頭という年代観が得られる。

（註１）行田裕美･木村祐子『長畝山北古墳群』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集』津山市教育委員会1992年

（註２）田辺昭三『須恵器大成』角川書店1981年

2　周辺の古墳

ここでは長畝山北古墳群と同時期あるいはそれに先行すると考えられる時期の古墳、すなわち横穴式石室採用前の古墳に限定して触れることにする。その代表的なものを第１図に掲載した。

正仙塚古墳（第１図２）

全長56ｍの前方後円墳である。明治16年に発掘され、石棺の中から半円方形帯神獣鏡、変形四獣鏡各１面、勾玉、管玉、鉄斧、土師器片等が出土した。また、人骨２体が出土したとも伝えられている。築造は５世紀前半頃と考えられている。（註１）

飯綱神社古墳群（第１図３）

４基よりなる古墳群である。このうち３号、４号の２基が調査された。３号は１辺10ｍの２段築成の方墳で葺石をもつ。主体部は組み合わせ石棺であるが、盗掘を受けており遺物はなかった。４号は径９ｍの円墳である。主体部は不明である。（註２）

六ツ塚古墳群（第１図４）

６基よりなる古墳群である。このうち１号、３号、５号の３基が調査された。１号は径17ｍの円墳に４ｍ四方の造り出しがつく。主体部は木棺直葬で墳丘に３、造り出し部に１が認められた。３号は径約

14mの円墳で木棺直葬3主体が検出された。5号は径15mの円墳で礫槨と埴輪円筒棺の2主体である。築造時期は5世紀後半から6世紀前半頃と考えられている。(註3)

玉琳大塚古墳（第1図5）

全長約30～35mの前方後円墳である。後円部には葺石は認められるが、埴輪はない。主体部は明らかではない。遺物としては馬具が出土している。(註4)

兼田丸山古墳（第1図6）

1.長畝山北11号墳
2.正仙塚古墳
3.飯綱神社古墳群
4.六ツ塚古墳群
5.玉琳大塚古墳
6.兼田丸山古墳
7.三毛ケ池古墳群
8.セウ田1号墳
9.井口車塚古墳
10.天満神社古墳群
11.蛇塚古墳
12.河辺上原古墳群
13.飯塚古墳
14.日上畝山古墳群
15.日上天王山古墳
16.日上和田古墳
17.河辺小学校裏古墳群
18.長畝山古墳群
19.三太林古墳群
20.西吉田1号墳
21.茶山古墳群
22.一貫西古墳群
23.大畑古墳群
24.隠里古墳
25.小原古墳群
26.崩レ塚古墳群
27.一貫東古墳群
28.金井宇根古墳群
29.根ノ山古墳

第1図 長畝山北古墳群と横穴式石室導入前の主要古墳分布図（S=1:30,000）

墳形は不明である。箱式石棺２基が検出されている。１号石棺から土師器の壷、２号石棺から四獣鏡１面が出土している。(註５)

三毛ケ池古墳群（第１図７）

現存８基の円墳よりなる古墳群である。詳細は明らかではないが墳丘の規模等からみて木棺直葬を中心とした古墳群と考えられる。(註６)

セウ田１号墳（第１図８）

全長38m、後円部径19.5m、同高さ1.6mの前方後円墳である。河原石による葺石が認められる。主体部は不明で出土遺物も明らかでない。(註７)

井口車塚古墳（第１図９）

全長35.5m、後円部径30m、同高さ5.5mの２段築成の帆立貝形古墳である。中段のテラスには埴輪が配されている。墳丘の周囲には幅2.5～4.5mの周溝が巡る。築造時期は５世紀末と考えられている。(註８)

天満神社古墳群（第１図10）

12基よりなる古墳群である。この内７基が調査され、木棺直葬と横穴式石室が共存することが判明しているが、主体は５世紀末～６世紀初頭頃の木棺直葬を中心とした古墳群である。(註９)

蛇塚古墳（第１図11）

径15m、高さ４mの円墳である。盗掘を受けており、頂部中央に大きな凹みが認められる。出土遺物等は明らかではないが、石材が散乱してないことから木棺直葬墳と考えられる。

河辺上原古墳群（第１図12）

円墳３基よりなる古墳群である。１号は２度にわたって墳丘を拡大していることが判明し、最終埋葬は礫槨であった。２号は木棺直葬３と竪穴式石槨１の４主体が確認された。３号はかなり破壊を受けていたが木棺直葬２が残存していた。築造時期は６世紀前半から中頃である。(註10)

飯塚古墳（第１図13）

径35m、高さ６mの円墳である。斜面には河原石による葺石が認められる。遺物としては埴輪片が採集されているだけで、他の出土遺物は不明である。

日上畝山古墳群（第１図14）

現存約50基よりなる古墳群である。築造は５世紀後半から６世紀前半頃にかけての時期と考えられている。

日上天王山古墳（第１図15）

全長約55m、前方部２段、後円部３段築成の前方後円墳である。中心石槨は盗掘を受けていた。石槨は南北方向に主軸をもち、内法で長さ4.4m、幅80cmを測る。美作地方最古の前方後円墳と考えられている。(註11)

日上和田古墳（第１図16）

墳丘の一部が残存するだけであるが、推定復元すると約18mの円墳になる。主体部は遺存していなかったが、聞き取り調査によると礫槨のようである。築造時期は６世紀前半である。(註12)

河辺小学校裏古墳群（第１図17）

現存円墳５基の古墳群である。この内の１基から須恵器等の遺物が採集されている。主体部は石材が認められないことから木棺直葬と考えられる。築造時期は５世紀末から６世紀初頭頃と考えられる。

長畝山古墳群（第１図18）

10数基の円墳よりなる古墳群である。この内２基が調査されている。１号は木棺直葬３、組み合わせ式石棺１の計４主体、２号は木棺直葬が２主体がそれぞれ検出されている。２号からは鍛冶具が出土している。(註13)

三太林古墳群（第１図19）

６基の円墳よりなる古墳群で現存するのは２基である。鉄剣等が出土している。主体部は木棺直葬である。(註14)

西吉田１号墳（第１図20）

径20m、高さ1.5mの円墳である。頂部には大きな盗掘壙がある。石材が散乱していないことから木棺直葬墳と考えられる。(註15)

茶山古墳群（第１図21）

全長20mの前方後円墳１基、径８mの円墳１基が調査されている。前方後円墳の中心主体は竪穴式石槨で、他に４つの主体部が検出されている。円墳の主体部は箱式石棺である。築造時期は６世紀初頭頃と考えられる。他にかって円墳１基の所在が確認されており、３基以上よりなる古墳群である。(註16)

一貫西２・３号墳（第１図22）

２号は１辺７mの方墳で幅１m前後の浅い溝がわずかに残るだけで主体部は不明である。３号は東西７m、南北８mの方墳で中心部に木棺直葬と考えられる主体部をもつ。築造時期は５世紀後半頃と考えられる。(註17)

大畑１・２号墳（第１図23）

両者とも径10m、高さ１mの円墳である。１号墳は木棺直葬５主体、２号墳は１主体である。６世紀前半から中頃にかけての築造である。(註18)

隠里古墳（第１図24）

箱式石棺に人骨３体が埋葬されていた。出土遺物としては勾玉３、刀子１がある。(註19)

小原古墳群（第１図25）

４基の円墳よりなる。１号は組み合わせ式石棺で、墳丘外に主体部１をもつ。２号は木棺直葬で、周溝に主体部２をもつ。３号は石蓋土壙である。４号は主体部不明である。１号・２号から製塩土器が出土している。築造時期は１～３号が６世紀初頭、４号がやや新しく７世紀前半頃と考えられる。(註20)

崩レ塚古墳群（第１図26）

方墳３、円墳１の４基よりなる。方墳は箱式石棺、円墳は石蓋土壙を主体部にもつ。いずれも出土遺物はなかった。(註21)

一貫東古墳群（第１図27）

前方後円墳１、円墳４、方墳３の８基よりなる古墳群である。前方後円墳は全長32mで葺石をもつ。内部主体は不明である。６号は方墳で葺石をもつ。８号は円墳で５世紀後半頃の須恵器が出土している。前方後円墳を除き５世紀代の築造と考えられている。(註22)

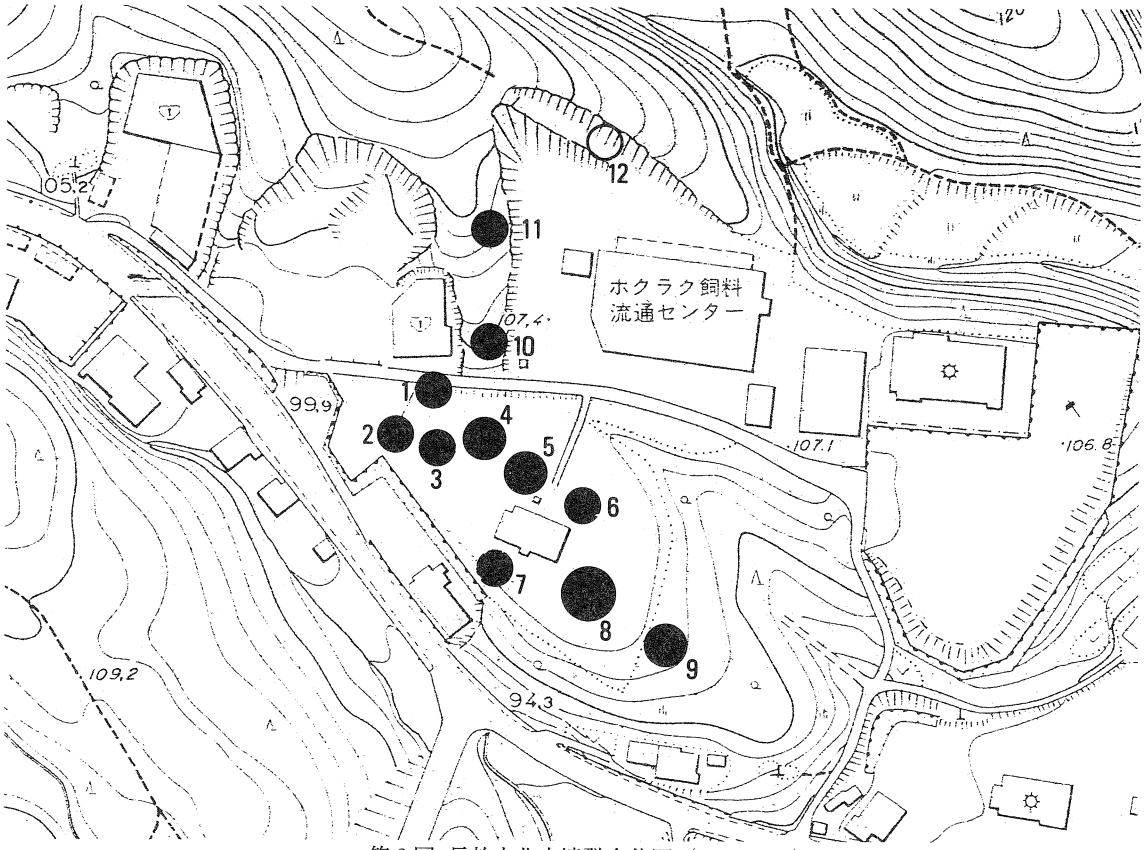
金井宇根古墳群（第１図28）

方墳５、円墳１の６基よりなる古墳群である。いずれも発掘調査されておらず内部主体、出土遺物とも不明である。(註23)

根ノ山古墳（第１図29）

全長27mの前方後円墳といわれている。内部主体は箱式石棺で変形獣形鏡、剣、勾玉、管玉等の出土遺物が知られている。(註24)

(註１)湊　哲夫「正仙塚古墳」『岡山県史第18巻考古資料』1986年
(註２)柳瀬昭彦･橋本惣司「押入飯綱神社古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告４』岡山県教育委員会1973年
(註３)河本　清「六ツ塚古墳群」『岡山県史第18巻考古資料』1986年
(註４)今井　堯「津山市川崎玉琳大塚調査報告」『津山市文化財調査略報第１集』1960年
(註５)本村豪章「美作･津山市兼田丸山古墳出土遺物の研究」『ＭＵＳＥＵＭ12』1974年
(註６)小郷利幸『三毛ケ池遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第48集』津山市教育委員会1993年
(註７)小郷利幸「津山市セウ田古墳群墳丘測量調査報告」『年報津山弥生の里第１号』津山弥生の里文化財センター1994年
(註８)小郷利幸『井口車塚古墳』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第52集』津山市教育委員会1994年
(註９)河本　清･橋本惣司･柳瀬昭彦･下沢公明「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７』岡山県教育委員会1975年
(註10)小郷利幸『河辺上原遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第54集』津山市教育委員会1994年
(註11)日上天王山古墳発掘調査団「日上天王山古墳発掘調査概要」『年報津山弥生の里第２号』津山弥生の里文化財センター1995年
(註12)行田裕美『日上和田古墳』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第６集』津山市教育委員会1981年
(註13)今井　堯「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史第１巻』津山市1972年
(註14)渡辺健治氏の御教示による。
(註15)行田裕美『西吉田遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集』津山市教育委員会1985年
(註16)保田義治『茶山古墳群』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第27集』津山市教育委員会1989年
(註17)行田裕美『一貫西遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集』津山市教育委員会1990年
(註18)行田裕美･小郷利幸･平岡正宏『大畑遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集』津山市教育委員会1993年
(註19)渡辺健治「美作隠里箱式石棺調査報告」『古代吉備第２集』1958年
(註20)行田裕美･小郷利幸･木村祐子『小原遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集』津山市教育委員会1991年
(註21)行田裕美･小郷利幸『崩レ塚古墳群･クズレ塚古墳』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第31集』津山市教育委員会1990年
(註22)湊　哲夫『一貫東遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集』津山市教育委員会1992年
(註23)小郷利幸「津山市金井宇根古墳群墳丘測量調査報告」『年報津山弥生の里第１号』津山弥生の里文化財センター1994年
(註24)美作考古学研究会資料による。



第２図　長畝山北古墳群全体図（S=1:2,500）

Ⅱ　調査の経過

1　調査に至る経過

平成７年２月20日付で岡山県津山市川崎94－１、ホクラク農業協同組合組合長理事山崎博文より、文化財保護法第57条の２第１項にもとずく埋蔵文化財発掘届が津山市教育委員会に提出された。発掘届の内容はホクラク農業協同組合飼料流通センターの敷地拡張に伴うものである。その際、津山市西吉田558－２所在の長畝山北11号墳が工事対象範囲に含まれるというものである。これを受け津山市教育委員会は発掘調査を実施するという前提で、平成７年２月24日付津教委文第99号で岡山県教育委員会に進達すると同時に、文化財保護法第98条の２第１項にもとずく埋蔵文化財発掘調査通知書を津教委文第100号で提出した。

2　調査の経過

発掘調査は平成７年３月６日から開始し、３月28日にはすべての作業を終了した。以下、日程と具体的作業内容は次のとおりである。

３月６日　立木伐採、草刈清掃後、調査前の写真撮影
３月７日　調査前の地形測量、表土剝ぎ
３月15日　表土剝ぎ終了
３月17日　表土剝ぎ終了後の写真撮影、地形測量、主体部掘り下げ
３月22日　主体部掘り下げ、土層断面写真撮影、実測
３月23日　主体部掘り下げ、写真撮影
３月24日　主体部実測
３月27日　　〃
３月28日　発掘器材搬出

3　調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記のとおりである。

津山市教育委員会	教　育　長		藤原修己
	教育次長		内田康雄
	文化課長		籾山三千穂
	文化財センター	所　長	神田久遠
	〃	次　長	中山俊紀
	〃	主　査	行田裕美（調査担当）
	〃	主　事	小郷利幸（　〃　）
	〃	主　任	青木睦子（事務担当）

整理作業は文化財センター嘱託、野上恭子、岩本えり子、家元博子が担当した。

発掘作業は社団法人津山市シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は下記の方々である。記して厚くお礼申し上げる次第である。（敬称略）

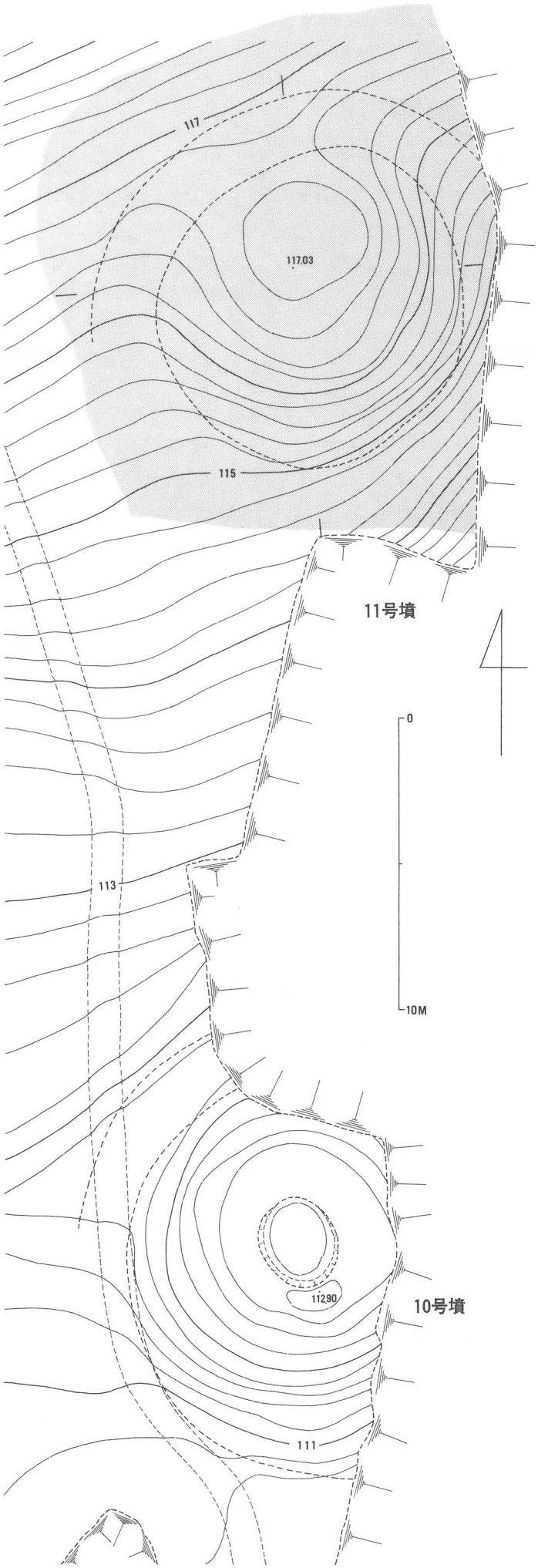
末沢賢次　藤沢淳一郎　森二三夫
桑名勝美　山下加海　荒島宗元
梶尾嘉明　岡田棯彦　広岡亀夫

Ⅲ　調査の記録

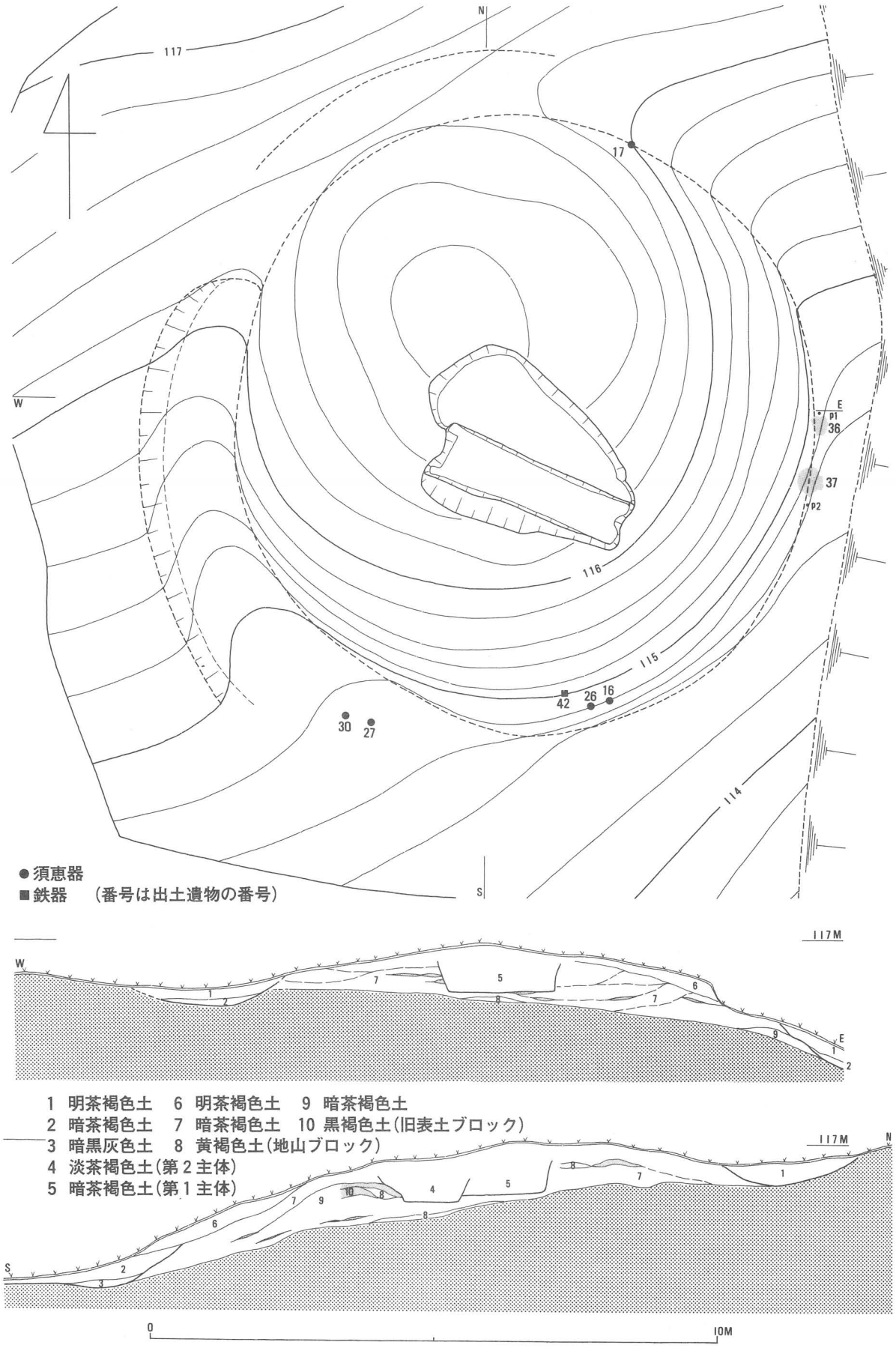
1　墳丘

調査前の段階では東側が造成によって墳端ぎりぎりまで削られ崖を呈しているが、墳丘自体には頂部に若干の窪みがある程度で、明瞭な撹乱穴などは存在せず、また周溝の痕跡もさほど明瞭ではない。本墳の南20mにはほぼ同規模の10号墳があるが、これについては墳丘の３分の１程がすでに削られ自然崩壊している（第３図）。さらに北東方向には12号墳がかつて存在していた。

本墳は丘陵の稜線上から東に傾斜した緩斜面に立地する、直径10～11m程の円墳である。斜面に構築されているが明瞭な周溝をもたず、山側は丘陵を幅1.1m程浅くカット整形する程度で、西側斜面に若干の周溝らしきものが幅1.5～２mで存在し、反対の東側については削られているため周溝の存在は不明である。墳丘の大部分は盛土によって構築されており、盛土は地山や旧表土のブロックを含むものが大半で、特に念入りに作られてはいない。斜面の南側にはブロックによる互層が多く見られる。高さは、山側で0.6m、谷側で2.6mを測りかなりの比高差がある。葺石・埴輪などの外表施設は見られない。また、墳端寄りの

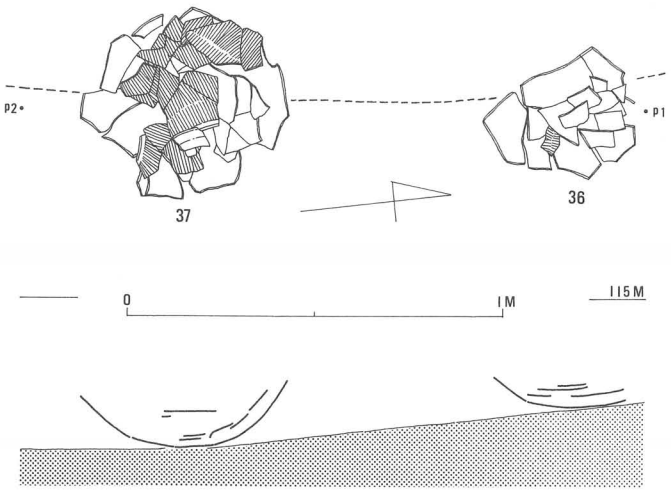


第３図 長畝山北10･11号墳調査前墳丘測量図(S=1:200)



第4図 長畝山北11号墳平面・断面図 (S=1:100)

斜面から須恵器や鉄器がある程度まとまって出土している（第４図●・■）。北側では須恵器杯（第８図17）が単独で、南側からは須恵器杯(27)と瑞(30)、またその東側では須恵器杯（16・26）と鉄鉾(42)、鉄鎌(41)がややまとまって出土した。これら須恵器、鉄器の出土状況から、埋葬施設が存在していた可能性も考えられるが、何分斜面にあり掘り方も存在しないため、埋葬施設であると特定はできていない。可能性としては、撹乱時に掻き出されたか、あるいは墓前祭祀的なものであろうか。さらに東側墳端部には須恵器大甕が２個据えてあった（第５図）。両者とも、甕の底部は据えられた状態を残しており、特に南側の甕は圧し潰された状態で、ほぼ完形に復元できた。



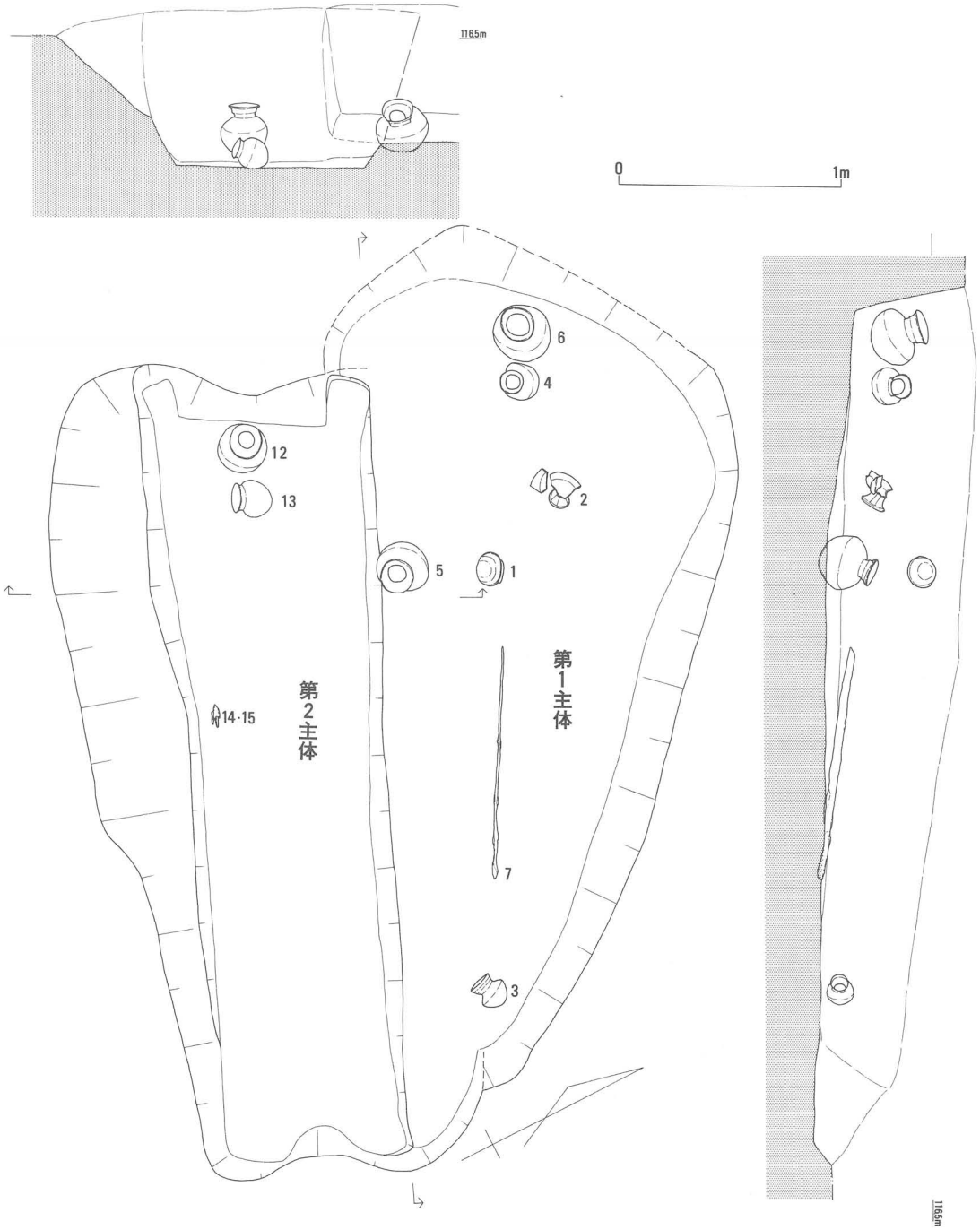
第５図 墳端須恵器大甕出土状況（番号は出土遺物番号）

2　埋葬施設・出土遺物（第６～10図）

埋葬施設は墳丘頂部に２主体検出した。埋葬施設の検出時には、第１主体のみを検出し、これと切りあっている第２主体については木の根がこの部分に多くあり、この時点では検出できなかった。その後土層観察から第２主体の存在と両者の切り合い関係から、第２主体の方が新しい事が判明した。このような経緯から第２主体の北側掘り方ラインが確認できていない。いずれの埋葬施設とも盛土を切って作られている。

第１主体　第２主体によって南小口及び西側壁が切られているが、墓壙掘り方を復元すると全長約3.4m、幅２m、深さ0.56m程の隅丸長方形を呈するものと推測される。その中に木棺が置かれていたものと考えられるが、木棺の規模や形態は明確でない。検出した副葬品は須恵器と鉄刀、ガラス玉である。本主体にも木の根が多く、また撹乱されている可能性から、これが当時の副葬品すべてを表しているとは言い難く、さらに原位置を保っているものも少ないと考えられる。ほぼ原位置を保っているのは北小口の須恵器甕（第６図４・６）であるが、この部分にも木の根が入り込んでいた。また、須恵器杯（１）はかなり浮いているため、動いているものと推測される。鉄刀（７）はほぼ原位置だが木の根によって刃先部分が浮いてしまっている。５の甕は第２主体との切り合い部分にあるためどちらに属するかは明瞭でないが、レベル的には第１主体に伴うものであろう。さらに、これら副葬品が棺の内外いずれに置かれていたかは、木棺の痕跡がわからないため不明だが、少なくとも鉄刀は棺内にあったと推測すれば、４～６の甕は棺外にあった可能性が大きい。また、北西側の埋土からガラス製の小玉が３個（第７図８～10）出土した。いずれも浮いた状態で位置にもばらつきがある。そのためガラス玉の出土した北西側を被葬者の頭位とするにはやや疑問があり、鉄刀の状況から反対の南東側が頭位であったと推測される。

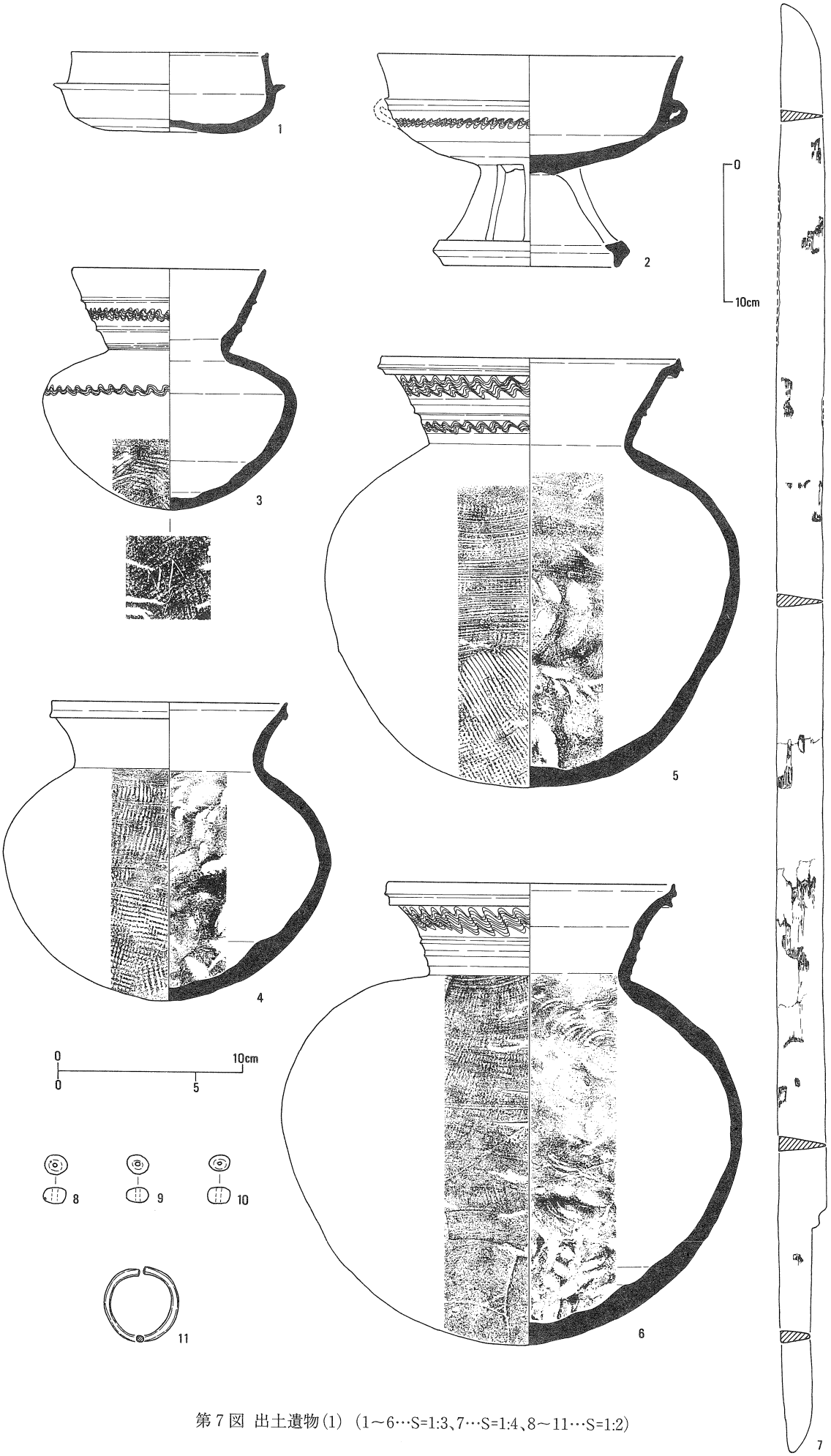
１は須恵器杯身で口径10.6㎝、器高4.4㎝、口縁が垂直に立ち上がり、端部には段がある。２は無蓋の高杯で杯部外面には１条の波状文と輪状の把手がつく。残存するのは１個だがおそらく両側について



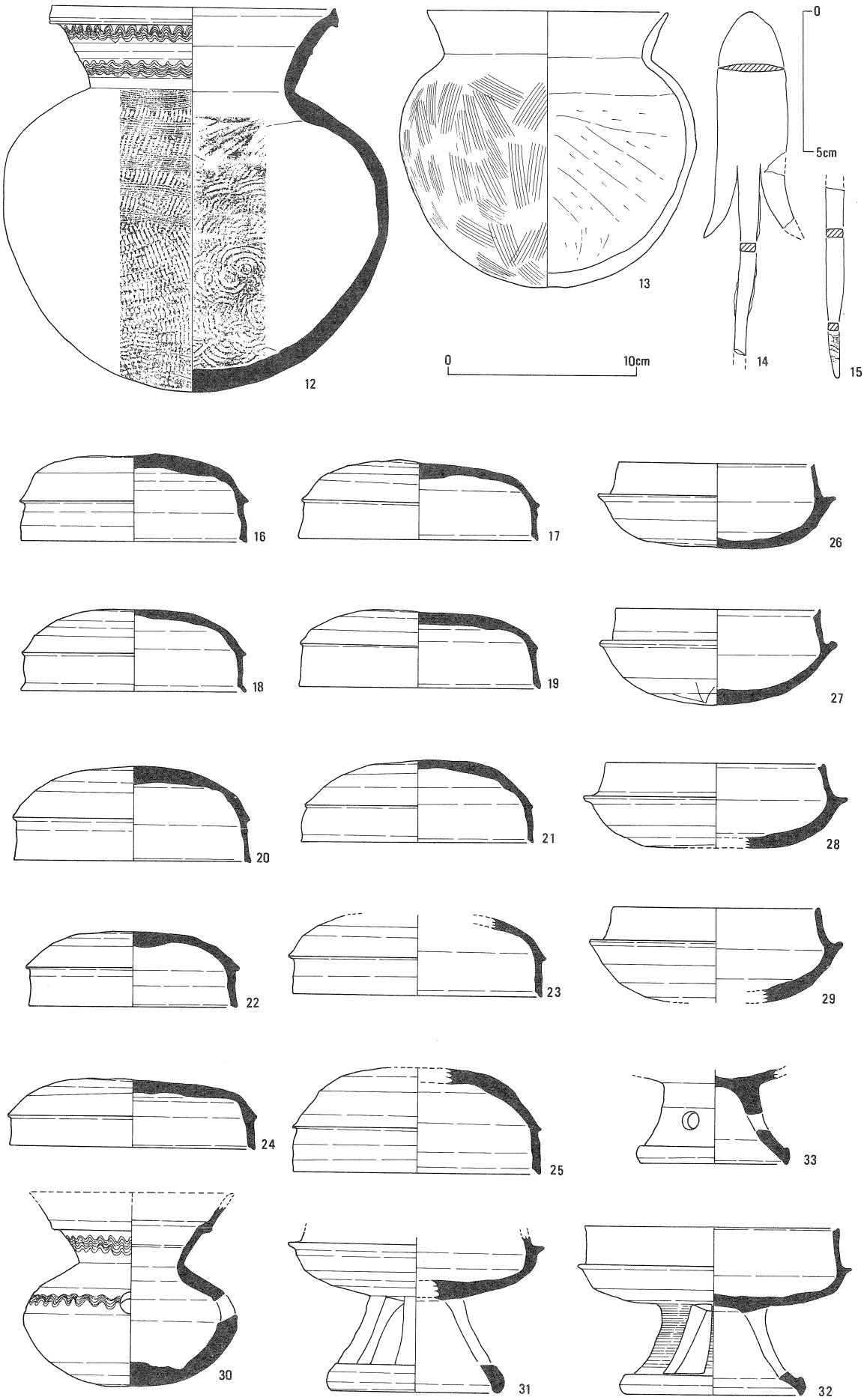
第６図 長畝山北11号墳第１・２主体平面･断面図（S=1:30）

いたものと推測される。脚部は方形三方透かしである。３は広口壷で頸部と胴部外面にそれぞれ１条の波状文が巡る。底部はタタキ仕上げであり、その上から山形のヘラ記号が施されている。４～６は甕で口縁端部を上方につまみ上げている。５・６は端面に凸帯を、頸部外面に１～２条の波状文を巡らす。胴部内面のタタキの当て具痕は撫で消しているが、６では上部にかすかに残存する。７は鉄刀で全長106.7㎝、刃部幅3.3㎝を測り、木質が部分的に観察される。８～10は青色のガラス玉である。

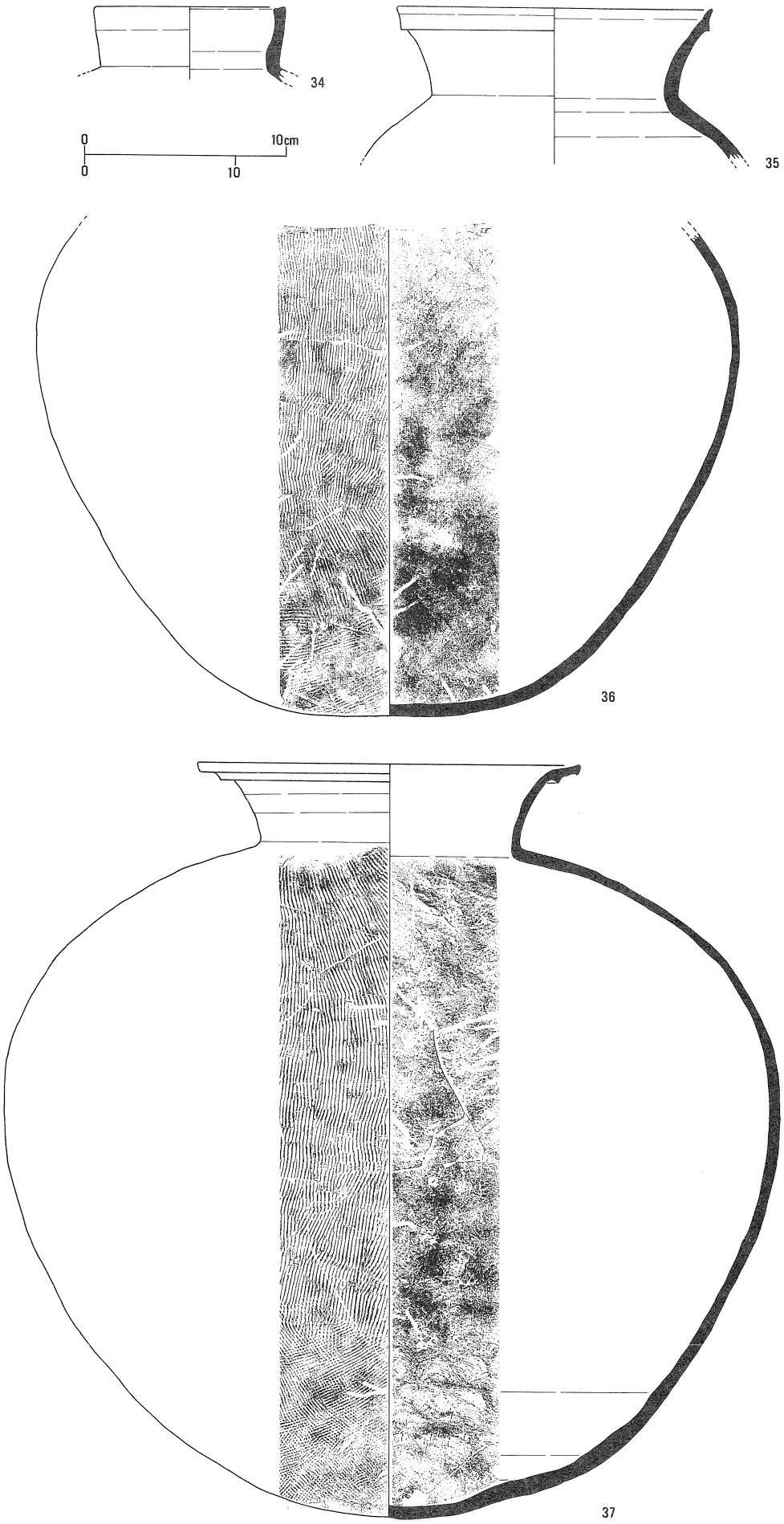
第２主体　第１主体を切って作られ主軸はやや西に振っている。北側の掘り方が明瞭でないが、墓壙掘り方は、全長3.6m、幅推定1.8m、深さ0.57mを測り両小口部分がへこんだ隅丸長方形である。内部の構造から木棺の形態をある程度推測する事ができる。木棺は側板が小口の外に出る形と考えられ、副



第７図 出土遺物(1) (1～6…S=1:3、7…S=1:4、8～11…S=1:2)



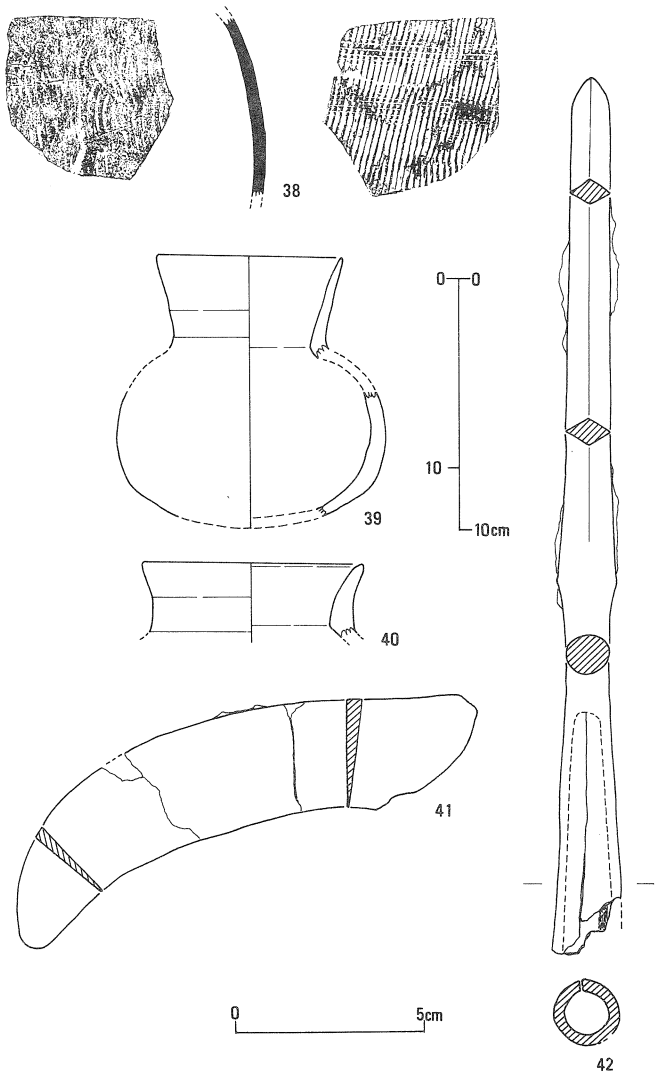
第８図 出土遺物(2) (12･13､16～33…S=1:3､14･15…S=1:2)



第9図 出土遺物(3) (34…S=1:3、35～37…S=1:4)

葬された須恵器甕（第６図12）や土師器甕（13）が棺内であるとすると、木棺規模は、全長約2.9m、幅0.5m程になる。ただ、この須恵器甕などが棺外である可能性も考えられる。と言うのは須恵器甕の外側に小口板をはめるには隙間が狭すぎ、さらに内側に仮に小口板をはめても内法はゆうに２mはあり、人を埋葬するには十分可能であるからである。この場合はこれら須恵器が置かれていた所は副室的なものと考えられる。いずれにしても、現段階では明確な結論に達していない。副葬品としては須恵器甕、土師器甕の他、鉄鏃（14・15）があるのみである。いずれも原位置を保っているものと推測できるが、埋土がかなり撹乱されている事から、これら以外に副葬品が存在していた可能性も捨て切れない。

12は須恵器甕で頸部に２条の波状文が巡り、胴部のタタキの当て具痕が明瞭に残っている。13は土師器甕で外面はハケ、内面はヘラ削りで調整している。14・15は長茎式の鉄鏃であるが15は茎の部分のみである。

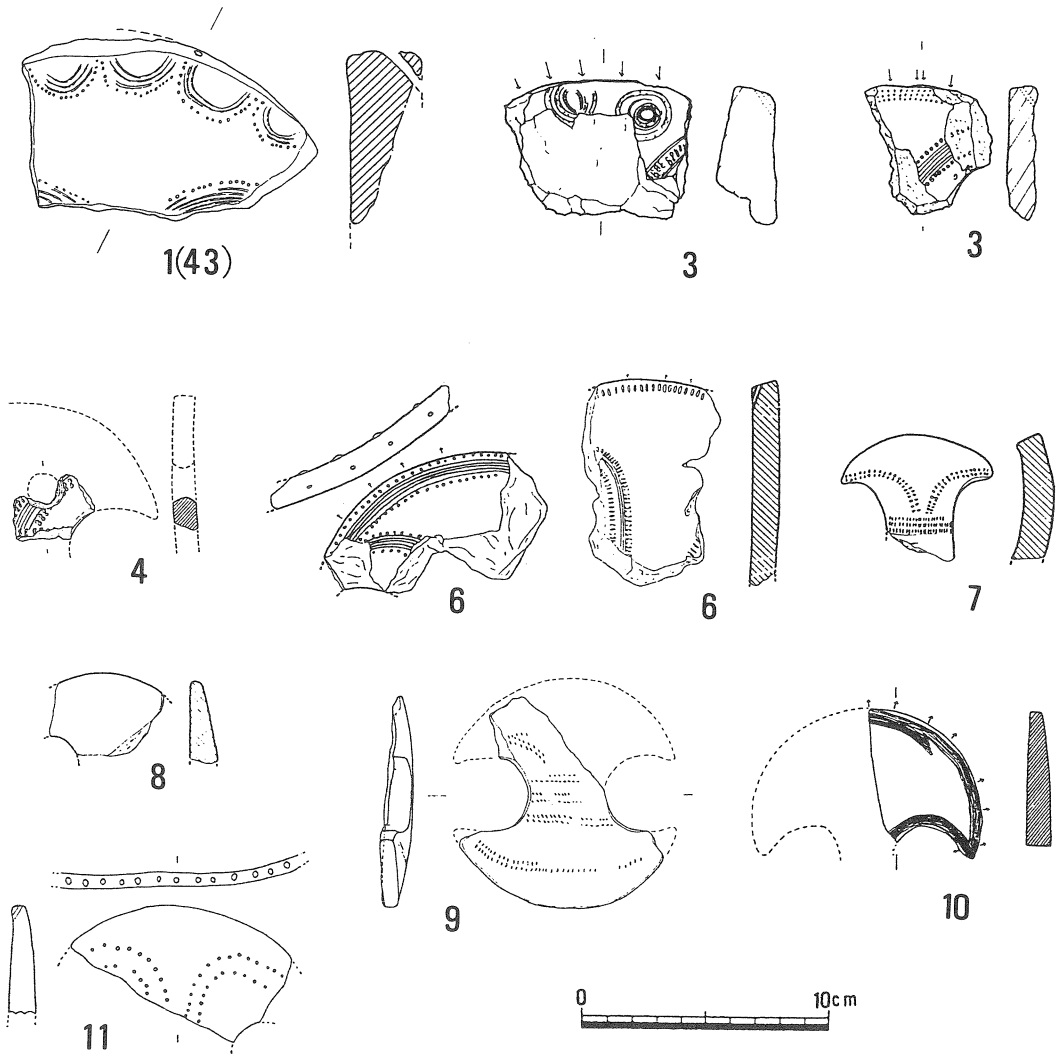


第10図 出土遺物(4)（38～40…S=1:4、41…S=1:2、42…S=1:3）

これ以外に、墳丘の周囲から須恵器、鉄器、さらに廃土内から耳環が出土している。第８図16～25は杯蓋である。口径11～13㎝、器高3.6～5.6㎝、天井部との境に明瞭な稜をもち、さらにプロポーションから複数のバリエーションが見られる。26～29は杯身で口径10.4～11.4㎝、器高4.5～5.1㎝、口縁部はやや垂直に立ち上がり端部に明瞭な段をもつものとそうでないものとがある。27の底部付近に「Ψ」のヘラ記号がある。30は瑞で口縁端部が欠損し、頸部と胴部外面に１条の波状文が巡る。31～33は高杯である。31・32は有蓋高杯で、脚部は方形の三方透かしである。33は脚部のみだが円形三方透かしである。34～38は甕である。34は直口の口縁部、35は口縁端部を上方につまみ上げている。36・37は墳端に据えてあった大甕で、37はほぼ完形に復元でき、胴部内面のタタキ当て具の痕跡は底部に若干残るが丁寧に撫で消している。38は墳頂部から出土した破片で、36・37とは別個体である。図示した以外に数点あり、この事から墳頂部にも大甕が供献されていた可能性が考えられる。39・40は土師器で39は直口壷で破片からの復元、40は甕の破片である。41は鉄鎌、42は鉄鉾で全長34.8㎝、刃部最大幅2.3㎝を測る。11は埋葬施設の廃土内から出土した銀製の耳環で、どちらの主体部に伴うものかは不明である。

その他本墳に伴うものではないが表土除去時に弥生時代の分銅形土製品（43）が出土した。破片であるが、残長11.6㎝を測り復元すればかなり大きなものになる。分銅形土製品は美作地方で13例出土して

おり（第１表）、津山市においては６例目である。



	遺　跡　名	所在地	点数	時期	参　考　文　献
1	長畝山北11号墳	津山市	1		本書
2	西吉田北遺跡	津山市	1		1995年津山市教育委員会が発掘調査
3	高橋谷遺跡	津山市	2	中期	1975~6年津山市教育委員会が発掘調査
4	押入西遺跡	津山市	1	中期	1980~1年津山市教育委員会が発掘調査
5	アモウラ遺跡	津山市	1	中期	1981~2年津山市教育委員会が発掘調査
6	野田遺跡	奈義町	2	中期	近藤義郎「分銅形土製品」『古代学研究６』1952年、 東潮「分銅形土製品研究(1)」『古代吉備第７集』1971年
7	勝央町植月金鶏塚	勝央町	1	中期	東潮「分銅形土製品研究(1)」『古代吉備第７集』1971年
8	〃　　鳥羽野	勝央町	1		〃　　〃
9	山根遺跡	久米町	1		久米町教育委員会『山根遺跡発掘調査報告』1979年
10	法事坊遺跡	久米町	1		久米町教育委員会「法事坊遺跡」『糠山遺跡群Ⅰ』1979年
11	西原遺跡	落合町	1	後期	岡山県教育委員会「西原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告６』1973年

第１表 美作出土分銅形土製品一覧表（神原英朗「分銅形土製品」『吉備の考古学的研究』1992年を元に作成）

Ⅳ まとめ

長畝山北11号墳は直径11mの円墳で、埋葬施設としては木棺２基を検出した。また、墳端付近から完形の須恵器や鉄器が出土し、東側墳端には須恵器大甕が２個据えてあった。

長畝山北古墳群は円墳12基の古墳群で、その内本墳をふくめ10基が調査され築造方法や時期的な面等詳しく考察されている（註１）ので、それらと比較検討しながら、簡単にまとめとしたい。

まず時期であるが、須恵器杯の特徴やその他の器種構成から、大阪・陶邑編年のTK23型式（註２）、美作地方の編年ではⅡ期（註３）にほぼ並行するものと考えられ、本古墳群がTK23～TK47型式の時期に相次いで築造ないしは追葬された従来の見解にほぼ総意する。この事から、これら一連の古墳群のなかでも古い時期に作られた古墳の一つと言える。

次に本古墳群の概略について簡単に述べる（第２表）。いずれも円墳であるが規模を見ると８m～17mとややばらつきがある。便宜的に分類する事も可能だが、規模の大小による優位性は現段階では読み取れない。また、埋葬施設は１～５基のものがあり、その中で複数の埋葬施設をもつ古墳が半数ある。埋葬施設の種類では木棺13基、竪穴式石槨３基で圧倒的に木棺が多い。ただこの両者の違いが何に起因するのか明瞭でない。また、埋葬施設が複数の場合で、ある程度時期差がある場合は墳丘をその都度大きくしている場合（河辺上原１号墳、註４）があり、この場合の墳丘構築については再検討する必要がある。さらに副葬品との関連で言えば、４号墳のみ埴輪を伴いやや特殊的に見えるが量的には非常に少ない。この時期の埴輪使用はこれら小規模古墳にも見られる現象ではあるが、すべてに伴うものではなく、複数立て並べていたとも考え難い場合もあるので、それ以前からの埴輪祭祀といった首長葬送儀礼的意味合いが薄れてきているのかもしれない。さらに、須恵器、鉄器、装身具などの出土状況を見ると、まず副葬品の位置では、須恵器は棺外それも足元の小口付近に置かれる場合が多い。中にはまったく伴わない場合もある（３号墳）。また、釘が出土していないことから、釘を使用しない型式の木棺と推定される。本墳の第２主体のように棺痕跡は明瞭でないが、掘り方から木棺の形態をある程度推測できる場合もある。さらに刀や剣の類いは被葬者の腰付近に平行に置かれ、この刃先の方向や耳環・玉類などの装身具の位置から頭位がある程度推測される。判明しているものでは南東方向を取るものがほとんど

	墳形	規模	埋葬施設		埴輪	出土遺物																	
			竪穴	木棺		須恵器	土師器	刀	剣	鉾	鏃	刀子	馬具	鎌	鑿	鉋	斧	鋤	耳環	玉	鉄滓	紡錘車	胡籙
1	円	8×	1			○					5	1											
2	円	8×		?		○	○												1				
3	円	10×1.4		1		○			1		7	1	○										
4	円	12.3×2.2		1	○	○						1							3	○	○		
5	円	14.5×2.2	1	1		○	○		1		14	1	○	1	1	1			1	○	○		○
6	円	11×2.5		1		○								1	1		1				○		
7	円	9.5×1.2		1		○	○	1			1	1		1			1						
8	円	17×2.4	1	1		○						1						1	1		鉄塊	1	
9	円	14.5×2.7		5		○	○	1			6	3			1						○	1	
11	円	11×2.6		2		○	○	1		1	2			1					1	○			

第２表　長畝山北古墳群一覧表

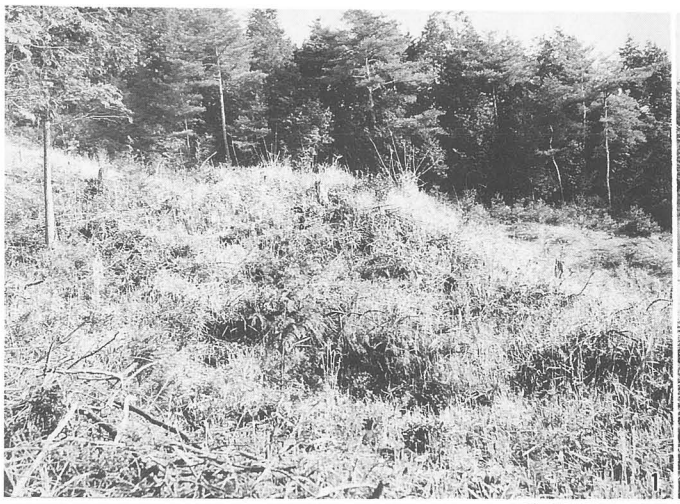
である。本墳の第１主体も刀の位置から南東方向が頭位と推測される。出土遺物の一覧表は撹乱されている場合もあるためすべてを網羅してはいないが、明らかに刀や剣をもつものともたないものとに差があり、複数埋葬がある場合でも刀剣をもつのは１主体だけである。また、馬具をもつものは３・５号墳だがいずれも轡の一部など単品であり、時期がやや新しくなってもその副葬形態はさほど変わらない。刀子や鉄鏃をもつものは10基中６～７墳と割合的には多くやや普遍的な遺物であり、その他鎌・鑿など農工具類が単品で加えられる。また、鉄滓や鉄塊を副葬するものが５墳あり、そのため被葬者と製鉄との関連が指摘される。次に本古墳群の構成（第２・11図）を見ると、ＴＫ23型式の時期に尾根の先端に５～９号墳、そして今回調査した11号墳が山よりに造られ、次のＴＫ47型式の時期に２～４号墳、８・９号墳が追葬され、長畝山北古墳群の埋葬は終了する。その後５号墳だけに追葬（ＭＴ15型式）が認められるが、これは普遍的な在り方ではない。従って本古墳群の形成に費やされた期間は、20～30年間いういとができよう。本古墳群と同一時期の古墳群は、道を挟んだ反対の丘陵にも所在する。長畝山古墳群で円墳約13基より構成される（第１図18、註５）。現在は道が通り別々の古墳群としてとらえているが、両者は同一の古墳群として認識した方がよいと考えられる。また、本古墳群の西側２㎞にもほぼ同時期の円墳約60基で構成される日上畝山古墳群（註６）が存在する。両者を合わせると約85基もあり、２㎞四方の範囲内にこれだけのほぼ短期間に築造された古墳が密集している事から、この地域の人のみを埋葬したとは到底考えられず、集団墓地として選地され、かなり広範囲の人がここに埋葬されたと解釈したい。ただ、この様に解釈した場合の社会的背景について言えば、そこに墓域を規制させるだけの勢力の存在が考えられる。これについてはやや漠然とした見解ではあるが、この時期本地域を統括していたと考えられる首長墳が存在しない事（ただ茶山１号墳（註７）など全長30m以下の小規模な前方後円墳は存在する）、この時期の古墳がいずれも直径10m前後の円墳に統一され、ほぼ等質的に須恵器や鉄器の副葬を行い、それまでの墓制とは大きく変化した画期が伺える。そしてそれぞれにさほど差異が見られない事などから、例えば鉄器など武器・武具類の掌握や渡来人による生産技術の革新により、各地域のこれら台頭してきた地域小首長層をある程度掌握・統率するだけの勢力の存在が考えられる。それを全国的な規模のものとして解釈すれば、この統率した権力を畿内政権と考え、当地域がこの時期には畿内政権による支配態勢の枠組みの中に組み込まれていたと考えられる。まさに本古墳群の様相はこの画期の社会状況を物語る良好な資料と言えよう。

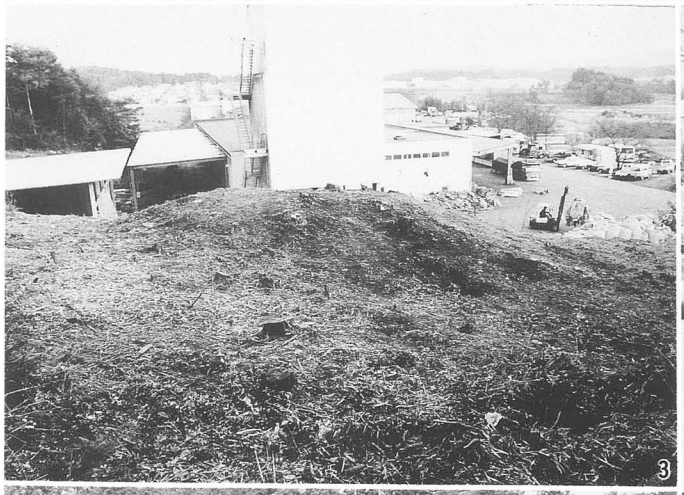
陶邑編年	ＴＫ23	ＴＫ47	ＭＴ15
美作編年	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
１号墳			
２号墳			
３号墳			
４号墳			
５号墳			
６号墳			
７号墳			
８号墳			
９号墳			
11号墳			

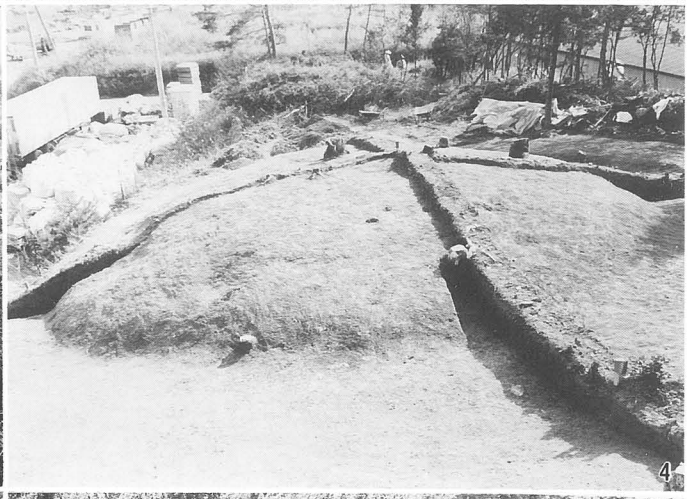
第11図 長畝山北古墳群消長図

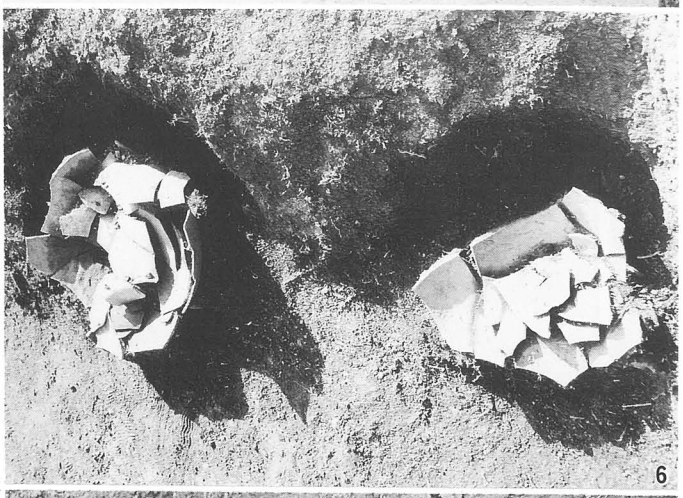
(註１)行田裕美他「長畝山北古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集』津山市教育委員会 1992年
(註２)田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
(註３)小郷利幸「美作における横穴式石室導入前の群集墳について」『門の山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第46集 津山市教育委員会 1992年
(註４)小郷利幸「河辺上原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第54集』津山市教育委員会 1994年
(註５)今井堯「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史第１巻原始･古代』津山市史編さん委員会 1972
坂本心平「長畝山２号墳出土の資料について」『年報津山弥生の里第３号』津山弥生の里文化財センター1996年
(註６)「六ツ塚古墳群・日上畝山古墳群」『津山市文化財調査略報４』津山市教育委員会
(註７)保田義治「茶山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第27集』津山市教育委員会 1989年

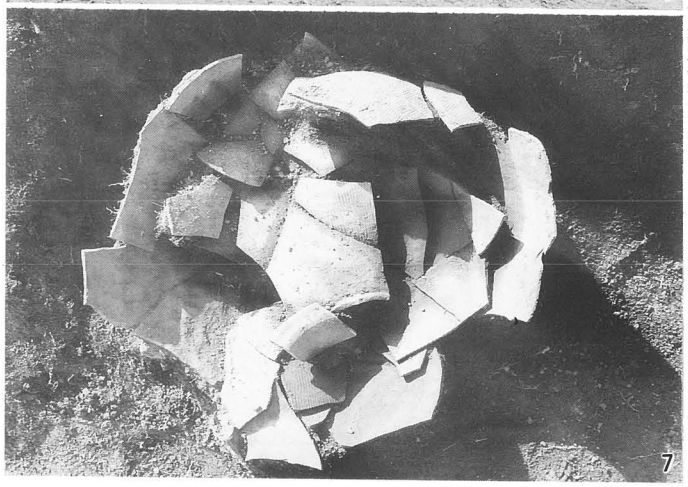
図　　版

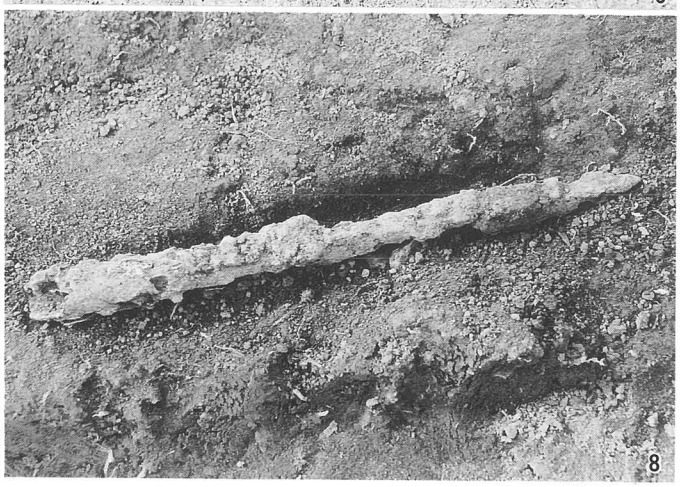






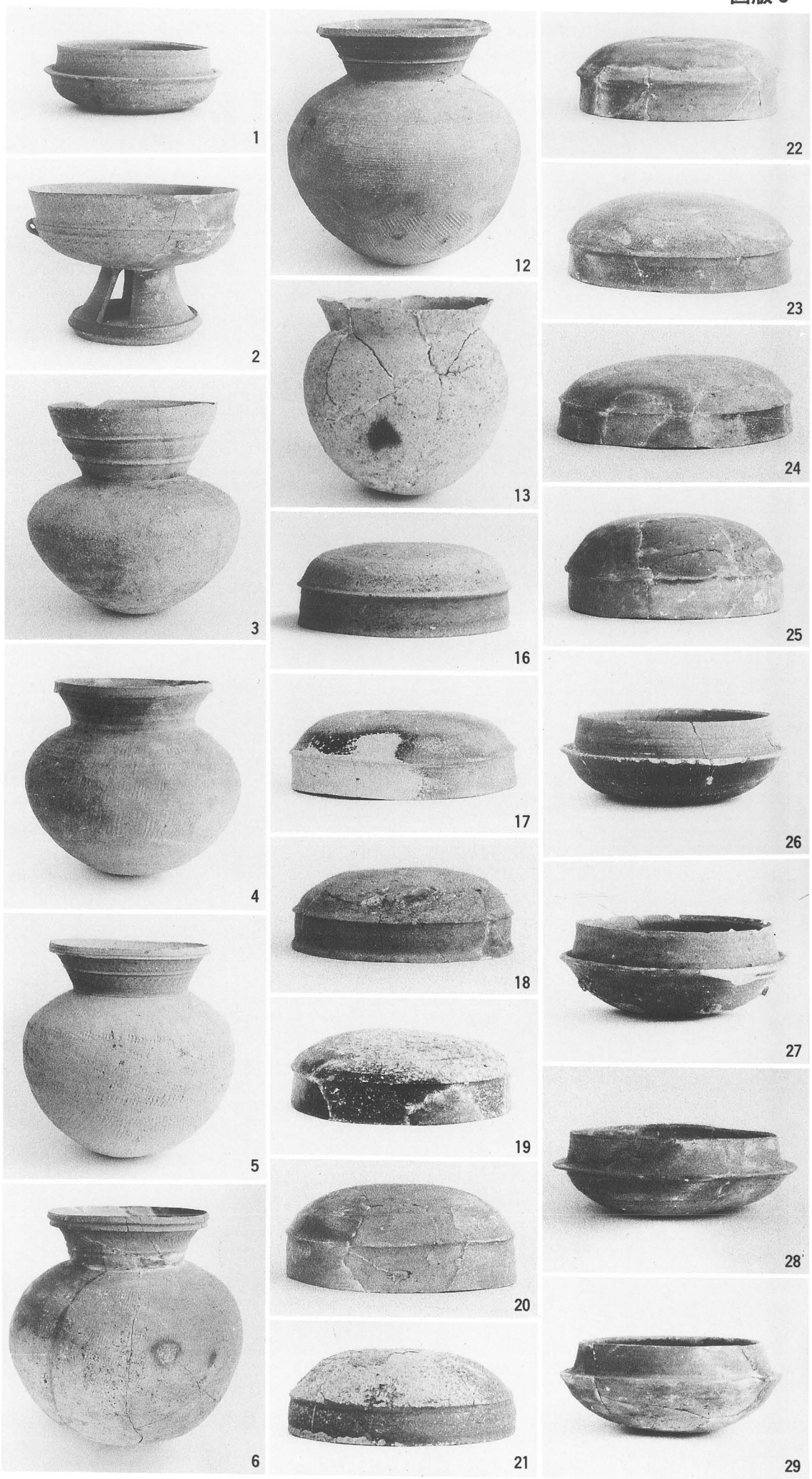




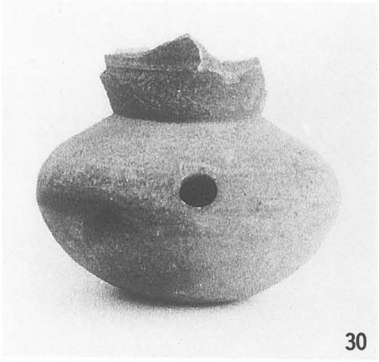


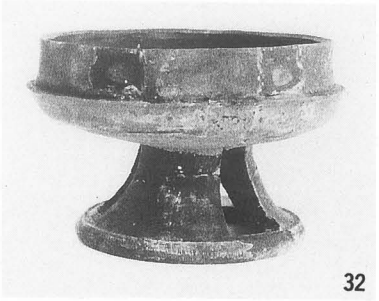
1　調査前(南から)
2　下草苅状況
3　下草苅後状況(北西から)
4　表土除去後全景(北から)
5　調査風景
6　須恵器大甕検出状況
7　須恵器大甕
8　鉄鉾出土状況

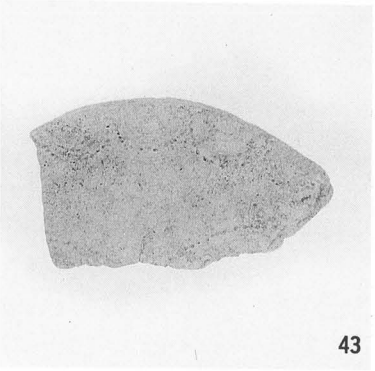
1 調査後全景(東から)
2 第1主体全景(北西から)
3 第1主体遺物出土状況
4 第1主体遺物出土状況
5 第2主体全景(南東から)
6 第2主体遺物出土状況

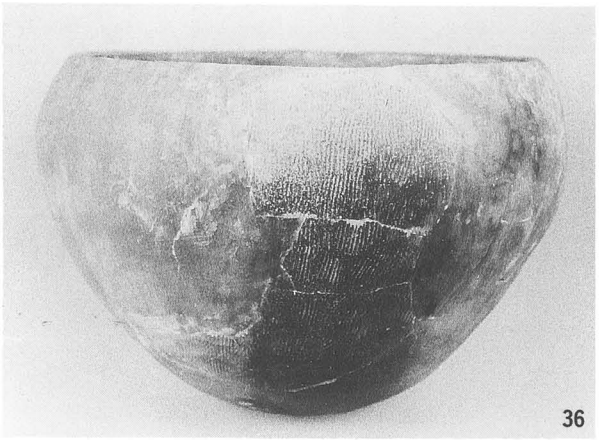


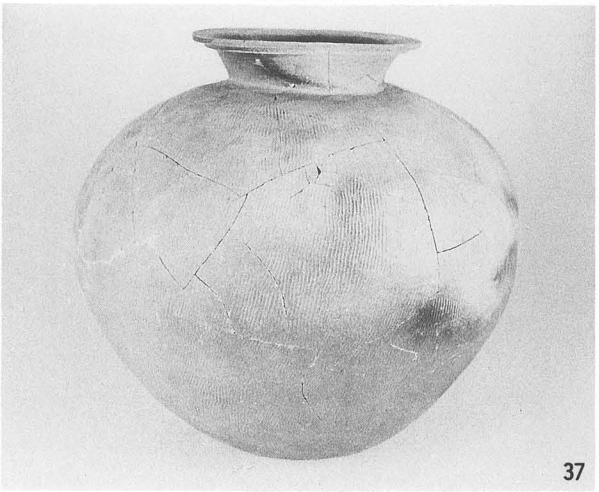
出土遺物（1）（番号は実測図番号）

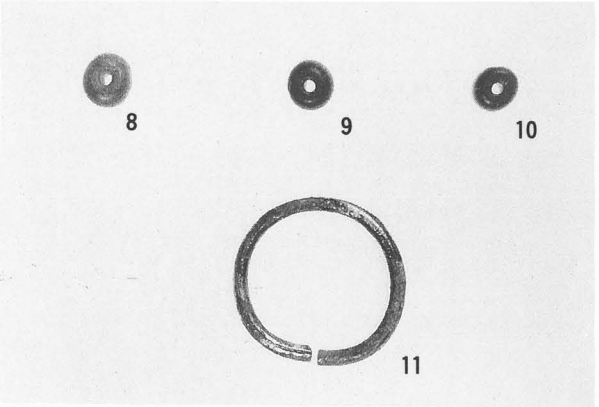


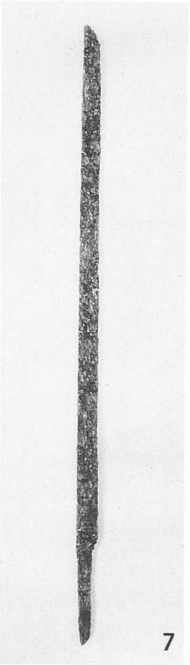


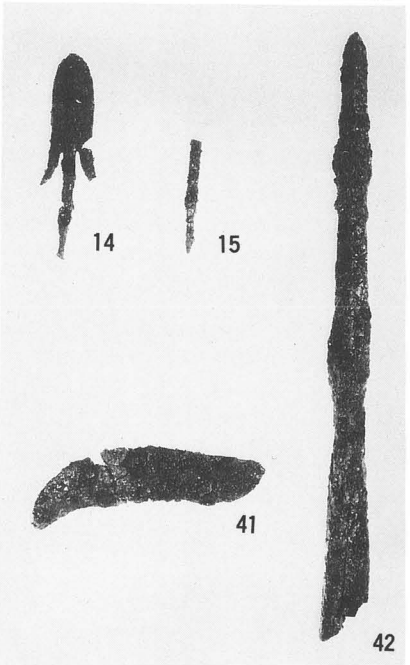












出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	ながうねやまきたじゅういちごうふん
書名	長畝山北１１号墳
副書名	
巻次	
シリーズ名	津山市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第５７集
編著者名	行田裕美　小郷利幸
編集機関	津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター
所在地	〒７０８　岡山県津山市沼６００－１　TEL 0868-24-8413 FAX 0868-24-8414
発行年月日	西暦１９９６年3月３１日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ながうねやまきたじゅういちごうふん 長畝山北11号墳	おかやまけんつやまし 岡山県津山市 にしよしだ 西吉田558-2	33203		35° 2′ 44″	134° 3′ 4″	19950306~ 19950328	270	民間工場敷地拡張に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長畝山北11号墳	古墳	古墳時代	古墳　１基	須恵器・土師器・鉄器・装身具	遺構に伴わないが分銅形土製品出土

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第57集

長畝山北11号墳

平成８年３月31日発行
発行　津山市教育委員会
　　岡山県津山市山北520
印刷　津山朝日新聞社
　　岡山県津山市田町13